こ と ば 雑 考〔Ⅱ〕

長谷川　鑛平

かげろう（陽炎）

かげろうと私どもが普通言うのは，空気が直射日光に暖められて密度に不均等をきたし，そこを通過する光線が乱されて，空気そのものがゆらめいているように見える，あの現象――陽炎のことである。しかし，古いものを読んでみると，必ずしもそれでは割り切れないものに，ままぶつかわす。そこで少し洗い始めてみたところ，厄介なことが群がり起って，一時は途方にくれる思いにも堕したが，ともかくも一往の目途が立ったので，以下にそれを略述することにする。

かげろう〔旧かげろふ〕と言えば，しかし，いまひとつ，陽炎とは別に，発音，並びにかな表記は全く同じである蜉蝣・蜻蛉のかげろう〔旧かげろふ〕がある。

かげろう カゲロフ（蜉蝣・蜻蛉）

①とんぼ（蜻蛉）の古名。

②カゲロウ目 Ephemeroptera に属する昆虫の総称。多くは体長10～15㎜。50㎜を越えるものは少ない。前ばねは透明で大きく，後ろばねは小さく退化し，やわらかく弱い体の後端に２本，中には３本の長い糸状の尾がある。他物に静止するとき前肢を使わず，中肢と後肢とでとまり，背上にはねを合わせ，前肢と尾とを上にあげる。春から夏にかけて湖沼，河川などに多く，幼虫は水中にすむ。幼虫は１年から２，３年かかって成虫になるが，成虫の寿命はまことに短く，１時間から数日，長くとも３週間であって，はかないもののたとえとされる。『徒然草』に“かげろふの夕を待ち，夏の蟬の春秋をしらぬもあるぞかし”とある。フタバカゲロウ，ヒラタカゲロウなど種類は多いが，カゲロウといえば私どものすぐ連想するウスバカゲロウやクサカゲロウは脈翅（みゃくし）目 Neuroptera に属する昆虫で，本当のカゲロウとは分類上異なる。『能因歌枕』に“かげろふ，ゑににたる黒虫，ほのかなる物にたとふ”とあるのは，黒虫というのだから，どうやらこのウスバカゲロウかクサカゲロウのようである。なお，ウスバカゲロウの幼虫は砂地にすりばち状の穴を掘ってアリなどの落ち込むのを待っているあのアリジゴクであり，クサカゲロウの卵はいわゆる“うどんげの花”である。

これらの虫のカゲロウという名は，その飛ぶさまが，かげろう（陽炎）のようにはかなげに，ひらめくところから来ているとされる。

虫のカゲロウは，陽炎のかげろうとは，発音，かな表記は全く同じでも，上記のように全く別物なので，一往論外とすべきであろうが，なかなかそうできない場合があるのである。陽炎と蜉蝣とは全く別ものでありながら，往往にして混同されがちである，ということを念頭に置いておいて，蜉蝣のかげろうは，ひとまず論外に置く。

1

例によってまず『広辞苑』〔Kと略記〕を見る――

かげろう カゲロフ〔陽炎〕

(1)春のうららかな日に，野原などにちらちらと立ちのぼる気。直射日光のため熱くなった地物の上で熱せられた空気が不規則な流れをもって上昇するため，空気密度の不均等が生じ，そこを通過

する光が不規則に屈折せられて起るもの。いとゆう。はかないもの，ほのかなもの，あるかなきかに見えるもの，などを形容するのに用いる。その際「蜻蛉」を意味することもある。(“かげろう・稲妻・水の月”と並べて，捕えることのできないもの，身軽ですばしこいもののたとえにされることもある。)〔アンダーライン—筆者，以下同断〕

(2)光が隠れて陰になること。(これは動詞「かげる」の延であるから，陽炎論からは除外してよいようである。)

そして『広辞苑』では，すぐ前の項に

かげろい カゲロヒ〔陽炎〕→かげろう

というのが掲げてある。なお，説明の途中に「いとゆう」というのがポツンとはいっている。後に大いに問題となるのであるが，今は一往注意を促すにとどめておく。

次に『新訂大言海』〔Dと略記〕を見る——

かげろふ カゲロウ（名）陽炎〔かぎろひノ転〕春ノ長閑ナル日ニ，空中ニ，チラチラト立上リテ見ユル気。イトユフ。アソブイト。遊絲 イウシ。野馬ヤバ。

六帖，一，「世ノ中ト，思ヒシモノヲ，かげろふノ，アルカナキカノ，世ニコソアリケレ」相模集「稲妻ハ，照ラサヌ夜ヨヒモ、ナカリケリ，イヅラホノカニ，見エシかげろふ」新後拾遺集，十二，恋，二「ツレヅレノ，春日ハルビニマヨフ，かげろふノ，影見ショリゾ，人ハ恋シキ」

ところで，ここにも「イトユフ，アソブイト，遊絲，野馬」と挿入してある。同義語の併記というよりも，由来のそれぞれちがう語を，あまりにも不用意に持ち出した嫌いが私には感ぜられる。後にあらためて触れる。

そして『大言海』には「かぎろひノ転」と容易ならぬ添書きがある。したがって，どうしても一往「かぎろひ」にさかのぼって検討しなければならない段取りになるのであるが，その前に漢字「陽炎」の方を検討しておこう。

角川『漢和中辞典』〔CKと略記〕——

陽炎(焔) ようえん（かげろう）

のどかな春の野などにちらちらと立ちのぼる気。〔同義語〕遊糸・野馬。

ここでも同義語として遊糸と野馬が引合いに出されている。そこで事のついでにそれぞれについて調べてみると——

◇遊糸(絲) ゆうし 春ののどかな日，野原などに立ち上る気。陽炎かげろう。

◇野馬やば (1)かげろう。いとゆう。陽炎。糸遊。(2)馬の一種。からだの小さい馬。

とあって，(2)馬の一種の野馬は，関わりないので別として，陽炎と全く同義であることがわかるが，ただし，野馬の項に「いとゆう・糸遊」が出ているのが腑に落ちない。遊糸を転倒すれば糸遊となり，これを湯桶読みすれば「いとゆう」となる，がそんなことではあるまい。しばらく疑問を存しておく。ところで角川の『漢和中辞典』だけでは心細いので，大修館の『漢和大辞典』〔DKと略記〕にあたってみた——

◇陽炎 かげろふ 遊絲・陽焔に同じ

◇陽焔 かげろふ 春の日に空にゆれのぼる気。

〔元稹，遣春詩〕陽焔浮春空，平湖漫凝陽。〔庶物異名疏」龍樹大士曰，日光著微塵，風吹之節中転，名之為陽焔。愚夫見之謂之野馬。漁人見之謂之流水。

◇游絲 かげろふ。いとゆふ。野馬。

〔沈約，三月三日率爾成篇詩〕游絲映空転，高楊払地垂。

〔盧昭鄰，長安古意詩〕百丈游絲争繞樹，一群嬌鳥共啼花。

◇野馬 (1)馬の一種。(2)かげろふ。遊気をいふ。春の発陽の気の空に見えるもの。陽炎。

〔荘子，逍遙遊〕野馬也，塵埃也，生物之以息相吹也。〔注〕野馬者，遊気也。〔釈文〕崔云，天地閉気如野馬馳也。〔疏〕爾雅云，邑外曰郊，郊外曰牧，牧外曰野，此言青春之時，陽気発動，遙望藪沢之中，猶如奔馬，故謂之野馬也。〔群書礼記〕野馬，日中遊気也。

とある。これでかげろうを野馬という所以もわかるし，野馬が「春の発陽の気の空に見える」あの「陽炎」であることは疑いない。しかし游絲の釈義にここでも「いとゆふ」が出してある。しかも「いとゆう」ではなく「いとゆふ」と旧かな表記になっているが，これはすなおには受け取れない。

2

私は先に『大言海』に「かげろふ——かぎろひノ転」とあることに注目した。私は「かぎろひ」が「かぎろい」になる〔kagirohi→kagiroi〕ことは

理解できるが，この「かぎろい」がどうして「かげろう」になるのか分らない。kagiroi→kgerou; kgerō？ それはともかく，まず「かぎろひ＝かぎろい」について，例によってまず『広辞苑』にあたってみると——

かぎろいカギロヒ〔陽炎・火光〕〔ちらちら光るものの意〕 (1)ちらちら光る日の光。『万葉集』一，48「ひむかしの野にかぎろひの立つ見えて顧みすれば月かたぶきぬ」(2)春ののどかな日に空中にちらちらと立ち上る気。かげろう。(3)ほのお。／「かぎろいの」となると枕言葉として「春」とか「燃ゆ」にかかる。云云。

『大言海』——

かぎろひ（名）火光〔嫐霧カガキラヒノ約転ナラム，此語ハ，かぎろふと云フ動詞ノ名詞形ナルカ，かげろふと云フ動詞アリ，此転ナルベシ〕(1)火災ノ雲焼クモヤケ。(2)カガヤク日ノ光。曜光。(3)転ジテ，かげろふ。陽炎。

「かぎろい」は，元来「火光」で，それが比喩的に「陽炎」をも意味するようになったのだというのであろう。とすると『広辞苑』の(1)—(2)—(3)の順序は，(1)—(3)—(2)とすべきで，その点，『大言海』のほうが説得的である。二者がくい違う場合，第三者を登場させるのが当然の手続なので，『日本国語大辞典』（小学館版，Nと略記）を見てみると——

かぎろい かぎろひ〔陽炎〕 (1)春のうららかな日に，地上から立つ水蒸気によって光がゆらいで見えるもの。かげろう。(2)明け方の日の出るころに空が赤みを帯びて見えるもの。〔ここに先に出た『万葉集』一，48「東（ひむがし）の野に炎（かぎろひ）の立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ〈柿本人麻呂〉が引いてある。〕そして，(3)炎などによって空の赤く染まって見えるもの。

となっている。そして語源説として，(1)カギルヒ（炫日・炫火）の転呼。カギルはカガヤクと同義〔雅言考・日本古語大辞典＝松岡静雄〕を掲げ，先に見た『大言海』のカガキラヒの約転説に優先させてある。カギルヒから由来しているのならば，(2)と(3)は受け取ることができるが，それが何故まず第一に「陽炎」を意味することになるのか，納得がわかない。しかも陽炎の説明に，空気が暖められて密度の不均等を来たし，それが光を乱屈折させるというのでなくて，陽光に暖められた地上から立つ水蒸気というのが出てくるが，これは著者のいささか不用意な勇み足ではあるまいか。陽炎は「かぎろい」としては，二次的に出てくる意味のものなのに，それを一次的に陽炎を意味するとするのは，ずいぶんおかしいと思う。

そこで例証として引かれている歌謡を検討して，できたら，ことばの真義を洗い出してみたいと思う。『大言海』の (1)火災ノ雲焼のところには『古事記』下，履中天皇に関する条の

河内ノ埴生ハニフ阪ニテ，遙ニ難波ノ火災ヲ望ミタマヘル大御歌「埴生阪，朕ワガ立チ見レバ，迦芸漏肥カギロヒノ，燃ユル家群イヘムラ，妻ガ家ノアタリ」

が引いてある。履仲天皇がはじめ難波の高津の宮においでになったとき，大嘗会にお酒によっぱらって大御寝おおみねしてしまわれた。そのとき弟の墨江中王すみのえのなかつみこが謀反を企てて大殿に火を放った。そこで近臣，阿知値あちのあたえが天皇を馬にかき乗せて大和へ逃げさせ申した。ところで天皇は河内の多遅比野タジヒヌに至ってやっと正気を取り戻しになった。やがて波邇賦坂埴生阪・ハニフザカにかかり，ふりかえって難波の宮を見ると，まだあかあかと燃えていた。そこで天皇のは

はにふ坂　我が立ち見れば　かぎろひの　燃ゆる家群いえむら　妻が家のあたり

とお詠みになった，というわけである。以上のように，物語のアクセント付けとしての歌としてみると，まだ燃えやまないで，「その火猶炳しるく，まだあかあかと見えていたのであるから，この「かぎろひ」はまさしく「火災の雲焼」(D)であり，「ほのお」(K)であり，「炎などによって空の赤く染まって見えるもの」(N)である。

『古事記』の本文の中において見れば，この歌はまさに上のように解さなければならぬが，この歌のできた真相ははたしてどのようであったろうか。何か別の機会にできた歌が，訴えるところがあるので記憶され，後年『古事記』の編纂されるときまで，その歌の記憶は温存されていたが，恐らくその作歌の事情，普通歌の前に付けられることば書きにあたるものは，忘れられてしまっていたのではあるまいか。それが『古事記』編纂のと

き，難波脱出の物語のアクセントとして，まことにふさわしいものなので，組み入れられることになったのかも知れない。日本古典文学大系『古事記』の校注者倉野憲司も「燃ゆる家群」の注釈として「物語歌としては，火のために燃えている一群の家であり，独立歌としは，陽炎がチラチラ立ち上っている一群の家である」(285頁) と記している。この歌は，泥酔中，忠臣によって九死に一生を得たことを知って，天皇がほっとして泳まれた歌としては，どうもさし迫るものが足らない。「妻問いをした夫が，朝妻の許から帰る途中，坂の上から妻の家を見てよんだ歌か，もしくは，単に坂の上から春の陽炎の燃える妻の家のあたりを見てよんだ夫の恋の歌であろう」(285頁) と言っておられる。火事とは関係のない民謡（夫が妻を慕う歌）があって，それが文学におけるフィクションとして，ここにはめ込まれたのであろう（同，27頁)。これは，やはり陽炎のちらめいてい春の頃の，温柔な恋心をただよわせた，ロマンチックな叙情歌である。

*

枕詞としての「かぎろひ」の例を，『万葉集』について，少し調べてみよう。

(1)巻二　柿本朝臣人麻呂，妻死せし後，泣血哀慟して作れる歌二首並に短歌 (207～212)

210　……かぎろひの〔蜻火之〕　もゆる荒野に……

或本の歌に曰く

213　……かぎろひの〔香切火之〕　もゆる荒野に……

ここは明らかに今の陽炎，かげろうである。

(2)巻六　寧楽の故郷を悲しみて作れる歌一首並に短歌 (1047～1049)

1047　……かぎろひの〔炎乃〕春にしなれば……

明らかに陽炎の燃ゆる春の意味の枕詞。

(3)巻九　弟のみまかれるを哀みて作れる歌一首並に短歌 (1804～1806)

1804　……かぎろひの〔蜻蜓火之〕　心もえつつ悲しび別る

ここでは「燃ゆ」にかかる枕詞で，陽炎に直接の関わりはない。

(4)巻十

1835　今更に　雪ふらめやも　かぎろひの〔蜻火之〕　燃ゆる春べと　なりにしものを

旧訓カゲロフを賀茂真淵がカギロヒに改めたものの由 (『万葉考』)。これは陽炎であることは明らかである。

以上4例では，明らかに陽炎か，「燃える」にかかる枕詞であって，別に問題はない。問題なのは巻一，48である。

(5)巻一，48（柿本人麻呂作）

ひむかしの　野にかぎろひの〔野炎〕　立つ見えて　かへりみすれば　月かたぶきぬ

沢瀉久孝『万葉集注釈』(Ⅰ)によれば，前半の東野炎立所見而は，古くは，アヅマノノ　ケブリノタテルトコロ　ミテと訓まれ，夫木抄や玉葉集にもそう訓まれたまま載せられていて，「あづま野」という地名を考える向きもあったのを，『万葉代匠記』で契沖がヒムカシノノと訓むべきかと一説を出し，結局，今日では上記のように落ち着いたのだそうである。ところでこの「かぎろひ」であるが，炎をカギロヒと訓むことは専門家がよしとされているので，素人の私として訓み方に今さら異論をさしはさむ余地はないのであるが，この「かぎろひ」はどう考えても陽炎ではない。そこで，やはり，太陽が登ろうとして東の野のかなたにあかね色の光がさすことを言ったものと思われるという沢瀉博士の説に，同ぜざるを得ない。

「かぎろひ」の「かぎろ」は「玉かぎる」(15)の「かぎる」と同じく輝く意味のことばの由であるが，かぎるひ＝炫る火が，どうして「かぎろひ」になるのか，専門家には割り切れない問題が残る由であるが，私にはそこまではわからない。

いずれにせよ，『古事記』履中記のカギロヒ（迦芸漏肥）と48のカギロヒ（炎）とは，端的に陽炎の意か，カギロヒノとして燃えるにかかる枕詞かに，してしまうことができないので困るのであるが，両者ともそれぞれただ1例があるだけで，類例が見出せないのでますます困ってしまう。

*

ところでこの「ひむがしの野……」の歌は，柿本人麻呂が持統天皇6年の，恐らくは冬の頃，後に文武天皇となられた軽皇子のお供をして安騎野に遊猟して野宿したときの作である。「東の野に陽光のかがやきがさしそめて，後ろをふりかえる

と月が西空に傾いている」(沢瀉口訳)。ところで，月が傾くというのは，あけがたではなくて，も少しさかのぼって，夜更けのことであろうとして，古代の畑の耕作が火耕法によっていたので，このかぎろひは野火であろうという説を出している人がある(村上可卿「かぎろひは野火である」『短歌声調』昭和26年4月—沢瀉『萬葉集注釈』I, 325頁)。「西は夕焼，東は夜あけ」と，大正前期に流行した歌謡の文句にはあるけれども，これは緯度の高いロシアでの話である。* わが国では「東は夜あけ，西に残月」でも，ちょっと無理ではなかろうかと常識的には考えられるところである。ところで世の中には特志家があるもので，このことの可能であったことをつきとめた人があるのである。橿原神宮の神苑にある国史館に，この歌に取材した壁画を揮毫した中山正実画伯が，中央気象台に問い合せてこの景観の可能である日時を攻究して貰ったところ，それは持統6年11月17日，西暦にすると692年12月31日ということになった。この日ならば，東に暁光，西に残月という事態は可能であったはずであると言う。安騎野は今の大宇陀町のあたりにあたる由。その日のあけがた，かぎろいが東に立ち（日の出前1時間)，月が西に傾く時が，午前5時50分と推定せられたのである。というのは，1日前の16日では阿騎野の西にある音羽山に月がかくれ(水平0度)てしまい，18日では高すぎる（16度）ので，どうしても17日（月高10度）としなければならないのだと言う（中山正実著『壁画安騎野の朝』—沢瀉，前掲書326頁)。驚いた次第であるが，天文学的に西に傾月，東に朝焼けということは可能であったのであった。

ついでながら，このアイディアは，蕪村の

菜の花や月は東に日は西に

にも見られる。陶淵明の詩句に

白日淪ニ西阿一，素月出ニ東嶺一，遙遙万里輝，
蕩蕩空中景

というのがあり，これと人麻呂の歌とが蕪村の肚裡にあったのであろうとされている（沢瀉，前掲書326頁；暉峻康隆・川島つゆ校注『蕪村集一茶集』日本古典文学大系58，82頁参照)。

* ちなみに，ロシアといえども，「西に夕焼け，東は夜明け」ということは，ちょっと無理だそうである。というのは，ロシアは緯度が高いので太陽も月も南方の地平線上，余り高くないところを出て没する。そこで南方の東寄りに太陽に出かかり，その西寄りに月が傾くわけで，同じく南方の地平線沿いの空に，いわば東西に並んで見える現象で，この歌の文句はやはり絵空事に近いと言わなければならぬそうである。私はこのことを和達清夫先生からうかがった。

*

道草が面白くてつい深入りしてしまった。先に言及した諸例のうち，明らかに陽炎でないのは，この「ひむがしの野のかぎろひ」だけで，履中記の「かぎろひ」は，あの説話のコンテキストにおいてみれば，明らかに「火災ノ雲焼」(D)であり，「ほのお」(K)であり，「炎などによって空の赤く染まって見えるもの」(N)であるが，独立歌としてみれば，陽炎でけっこう辻褄が合うばかりでなく，むしろこの方が落ちつく。現に管見では『日本国語大辞典』だけではあるが履中記の「かぎろひ」の歌を，(1)かげろうの項の例証に挙げてある。編集者はこの歌を独立歌として見たのであろう。輝く意味の「かぎる」が「かぎろふ」となり，その連用形「かぎろひ」が名詞化したのであれば，履中記の「かぎろひ」はそれで片つくけれども，そうなれば，陽炎とは無関係のはずである。枕詞としての「かぎろひの」は「燃える」を導くのだから，やがて「萠える」に，したがって草木の萠える「春」に結びついてもおかしくはない。先に5例を考えたが，名詞と見て見ることのできるのは(1)と(4)とで，これらとても「の」を接合させて枕詞と見ても，それはそれでよいはずである。

古典日本語について素人である私は，そこで，「かぎろひ」は陽炎を意味し，枕詞「かぎろひの」は燃える→萠えるを導く，ときめてしまって，履中記と「ひむがしの野」との「かぎろひ」は，別語であると観念した方がよくはないかと思う。辞典にそれぞれ3義を用意してあるのは，履中記の「かぎろひ」と「ひむがしの野」の「かぎろひ」の処置に窮しての姑息の便法のようにも思えてならない。ただ1例だけずつしかないようなので，きめ手がなくて困るわけである。

そこで私の一往の結論とてしは——「かぎろひ」は「かげろう」と同義であるが，音韻上，どのような関連にあるかは，わからない，ということになる。

3

そのかげろう＝陽炎が，漢語の遊糸・野馬と同義であることは，先に『漢和中辞典』と『漢和大辞典』とを引いて明らかにした。その遊糸を転倒すれば，糸遊となるが，漢語に糸遊というのはない。もっとも『漢和中辞典』には糸の項には――

糸遊 いとゆう・イトユウ〔国〕かげろう。陽炎。

と挙がっている。〔国〕は凡例を見ると「熟語で，国語特有の意義」とある。つまり「糸遊」はわが国で作られた擬熟語で，したがって音はなく「いとゆう」という訓しかない。しかし「いとゆふ」ではないはずである。そして「いとゆう」は，口語としては，意味はともあれ，存在権は一往，厳にあることばのようである。

『広辞苑』――

◇いとゆう〔糸遊〕(1)陽炎。(2)カゲロウ（動）の別称。(3)糸遊結＊の略。

＊〔いとゆうむすび（糸遊結）(1)糸を揚巻に結ぶこと。また，几帳の飾りの緒の所々を揚巻に結んで長く垂らしたもの。(2)花の形に結び連ねた緒を少年の狩衣の袖に張りつけたもの。〕

そして逆に国語辞典で「かげろう〔かげろふ〕」の項を見ると，つねにこの「いとゆう」が同義語として，まるで当然のことのように書き添えてある。そしてこの「いとゆう」を，仮りに糸遊を訓んだものとすると，訓よみ＋音よみ，いわゆるユトウヨミ（湯桶読み）である。しかし，それはイトユウであって，イトユフではない。したがって，糸遊をイトユウと訓むとしても，それは簡単にイトユフと同一視することはできないはずである。幸田露伴はこの「いとゆふ」に疑問を呈している。というのは芭蕉七部集『冬の日』に

寂として椿の花の落ちる音　　杜国
茶に糸遊をそむる風の香　　重五

というのがある。重五の句の意味は，素人の私にはわかりかねるが，「茶の湯気の立ちまじるかげろうに，吹く春風のかおるかと思われるの意か」と中村俊定は書いている（日本古典文学大系『芭蕉句集』連句篇339頁）。露伴には「陽炎ゆらゆらと立つところに有るか無きかの風渡りて茶煙軽く靡〔なび〕きかかり，いとかすかに盧仝遊外の徒の喜ぶところの香の添はりて流るるをば，彫鏤の手段を尽して，茶に糸遊をそむる風の香とは作れるなり」（『露伴評釈芭蕉七部集』126頁）とある。この方が，解釈はこまかいようである。（ちなみに盧仝〔？～835〕は唐の済源の人，茶を好み詩をよくした人という。）ところで露伴の疑問は

「いとゆふの語，いつの頃より言ひ出でしか詳ならず，おもふに古きことならざるべし。文永に成りたる続古今集巻八，非有非空の心を詠じたまへる太上天皇の御製に，大空をむなしと見れば糸遊の有るにもあらず無きにしもなし，とあり。これを糸ゆふと訓むべきにや，若くは糸遊にはあらで遊糸とありしが誤りて糸遊となり，それより「いとゆふ」と訓み来り，遂に一語をなすに至りたるにあらずやとおもはる。遊糸とあらば「かげろふ」と訓むべきこと勿論なり。遊糸は漢語にして，陽炎の状の遊糸の如くなるより云へるなり」（同上126頁）

とある。ここに遊糸の如くとある遊糸とは何か，は後考を待つとして，前記中村俊定の頭注によると，藤原家隆（1158～1237）に「長閑なる夕日の空をながむれば薄くれなゐにそむる糸遊」という歌がある。家隆は藤原定家（1162～1241）より4歳年長で，定家と共に歌聖と称された歌人で，後鳥羽院に殊遇され，定家と共に『新古今集』（元久2＝1205）の撰にあずかった。ところで露伴の言及した『続古今和歌集』は文永2年（1265）の撰なので，家隆の生存時よりも，大分後のものである。その家隆に「……そむる糸遊」とあるので，当時「糸遊」という語はすでに行われていたもののようである。

そこで『大言海』にかえると

「いとゆふ〔陽炎〕あそぶいとゆふヲ見ヨ」とある。そこでその項に行く前にまず「あそぶいと」を見ておくと，

あそぶ―いと(名)〔陽炎〕次次条〔あそぶいとゆふ〕ヲ見ヨ

あそぶ―いと(名)〔遊絲〕〔漢語の遊絲イウシノ文字読モジヨミナリ〕陽炎カゲロフノ異称。末木抄，三「光リアル，二月キサラギノ日ニ，あそぶいとニ，緑ノ空モ，マガヒミエケリ」永久四年〔1116〕百首「遙遙ト，浅緑ナル，大空ニ，あそぶいとヲヤ，ナガメクラサム」

とある。あそぶいとを，陽炎の異称とされている

遊糸の，単なる文字読みに過ぎないと簡単に片つけてよいか，実はすこぶる問題なのである。というのは，それは実は，空をとぶ小蜘蛛，いわゆるゴッサマーであったかも知れないからである。結論を先取りすれば，中世の人はゴッサマーを知っていて，それと空気のちらちら浮動する陽炎とをちゃんと識別して観賞していたらしいのである。それがその後，見失われ忘れられて，大槻博士も『広辞苑』『日本国語大辞典』の編者らも依然その忘却の伝統の呪縛の中にあるようなのである。このことについては後に詳述するが，その前にもう少し『大言海』を引いておこう——

あそぶ—いとゆふ(名)〔陽炎〕〔漢語ニ，陽炎カゲロフヲ，遊絲イウシトモ云フヲ，文字読モジヨミニ，あそぶいとト云フナリ，ソレヲ几帳ノ絲結イトユヒノ浮遊アソビ揺曳ユラメクニ寄セ，陽炎ノタナビクニ見立テテ，あそぶいとゆふト云フナラム，ソレヲ上略シテいとゆふトノミモ云フ，漢語ノ遊絲イウシモ，揺曳スル絲ノ意ナルベシ，沈約詩「遊絲映空転」，張憲詩「遊絲冉冉掛ニ簷角ニ」，玉篇「冉冉，行也，進也」〕かげろふ（陽炎）ノ異称。又あそぶいと。いとゆふ。朗詠集〔著者＝藤原公任 966～1041〕下，雑，晴「霞晴レ，緑ノ空モ，ノドケクテ，アルカナキカニ，あそぶいとゆふ」六百番歌合〔建久 4＝1193，藤原良経宅〕十九番，春，野遊「春来レバ，靡ク柳ノ，友ガホニ，空ニ紛フヤ，遊ぶいとゆふ」二十番「佐保姫ヤ，霞ノ衣，織リツラム，春ノ三空ニ，あそぶいとゆふ」二十四番「繰リ返シ，春ノ絲ゆふ，幾世経テ，同じ緑ノ，空ニ見ユラム」永久四年百首「シヅケクテ，吹キ来ル風モ，ナキ空ニ，乱レテあそぶ，いとゾ見エケル」狭衣，一，上「いとゆふカ何ゾト見ユル薄キ衣ヲ，中将ノ君ニ打チカケテ」。此一条ノ解ハ，碩鼠漫筆（黒川春村）六，絲ゆふ考ニ拠レルコト多シ。

4

それにしてもひどくこんぐらかってしまった。私は敢えて錯綜する糸筋をたどってみたのであるが，実はこれは前にもちょっと暗示したように，空とぶ小蜘蛛の糸のことを，昔の人はよく知っていて，それを時に「かげろう」とも「あそぶいと」とも言っていたものらしい，その知識が近世に近づいて失われてしまい，そこで『大言海』の著者も，『広辞苑』の編者も，「かげろう」をめぐっての解釈・理解に，あのような混乱と不透明を持ち込むことになってしまったのではあるまいかと私は考えるのである。私はかつてチャールズ・ダーウィンの『ビーグル号周航記』を読み，またハドスンの『ラプラタの博物学者』をひもとき，ゴッサマーのことを知っていたし，またそう言われてみれば，春や秋の澄みきった空中を，かすかにチラリとあるか無きかに閃いて，細い細い絹糸か，真綿の毛羽のようなものが光って流れるのを目に追った経験が，たしかに何度もある。折柄，錦三郎の『飛行蜘蛛』（丸ノ内出版，1972年4月刊）が出た。さっそく一本をあがなって読んだ。そしてそこに「文学作品のなかの gossamer」という章があって，遊糸・かげろうのことが，中国の詩のなかの遊糸，日本の漢詩のなかの遊糸，仏典のなかの陽炎と遊糸，平安時代の文学作品における「かげろふ」および「遊ぶ糸」，鎌倉時代以後の「かげろふ」「遊ぶ糸」と，詳細にわたって論じてあるのに接した。考察は周到，且つ網羅的で，すこぶる説得力に富んでいる。

ところで道綱母の『かげろふ日記』というのがある。道綱の父藤原兼家（929～990）は関白右大臣師輔（908～960）の第三子，兄兼道（925～977）を乗りこえて出世街道を驀進し，娘詮子を円融天皇の女御にいれ，その所生が一条天皇となられ，摂政・氏の長者となり，やがて道長（第五子，966～1027）の全盛時代に推移する，そういう兼家の，ひと頃は思い妻であった女性のものした『かげろふ日記』は，ふつう一人称の日記体小説，ないし小説的自叙伝であると言われる。その「かげろふ」は時に「蜻蛉」と書かれるので，この「かげろふ」は普通蜉蝣，蜻蛉と書かれるもの，つまりトンボの古名か，カゲロウ目もしくは直翅目に属する昆虫とされてきた。このことについては本文の冒頭にも触れておいた。いわゆる昆虫のカゲロウは体も翅も弱弱しく，夏水辺をとび，産卵をすると間もなく死ぬ。それだのに，幼虫期はすこぶる長く2年も3年もかかってようやく成虫に羽化する。もっともこれはカゲロウに限らず，セミやホタルもそうであるが，長い幼虫時代を凌いでやっと成虫になると，産卵してはかなく死んでしまう。そこではかないもののたとえに用いられ，「かげろふのいのち（蜉蝣の命）」ということばができた。

そういうわけで道綱母の『かげろふ日記』は『蜻蛉日記』と書かれることがあるわけであるが，これに対して『日本古典文学大系』所収『かげろふ日記』の解説者川口久雄は異説を主張される。川口は，それはあの心細い小さな昆虫カゲロウではなくて，ゴッサマーのカゲロウであると情熱的に主張するのである。

「それはヨーロッパで聖処女の機はたのおさから落ちたノートル・ダムの糸 fils Notre-Dame だと信ぜられたもの，シェークスピアがジュリエット姫のあしどりの軽さ，恋のあだな喜びを形容したところでゴサマア gossamer とよんだもの，わが常民の間で雪迎えとよばれていたもの，晩秋や早春の空をゆらゆらと流れるようにとびかう糸遊いとゆうである。目に見えない蜘蛛の子が，自ら紡ぎ出す糸に乗って，風媒によって散布される姿の，もつれてとぶ五彩のてりかげり，私は戦争の終末の近づいた晩秋のある日，人間を絶した立山の雑穀谷ざこくだにの澄んだ空気の中をとぶのを見た，——かげろふのものはかなげにとびちがふを，ありとみて手にはとられず，みれば又ゆくゑもしらずきえしかげろふ，あるかなきかの……源氏物語のかげろふの巻につぶやかれるものは正しく gossamer であった。これに定家あたりが蜻蛉の文字をあてたばかりにそれ以後の人々をことごとく誤らせ，ついにながくその実体を見失っていたのであった。だから契沖以後ことごとしい考注のたねになったけれども，蜻蛉というまぎらわしい漢字をあてることは適当でないといえる。」(85—6頁)

あまりにも熱情を盛った名文なので，つい長長と引用してしまったが，ゴッサマーの認識の平安時代の日本人の間にあったことを再確認されたことは十分に評価できるが，『かげろふ日記』の「かげろふ」を一概にゴッサマーにきめてしまうことは，いささか性急に過ぎはすまいか。はかないものの寓意なら，陽炎のかげろふに比定しても，小形のトンボ，カゲロウ目ないし脈翅目のかげろふに比定しても，十分つじつまは合うようであるからである。

錦三郎は文学作品における遊糸・かげろうを，中国の詩，日本の漢詩，平安時代の文学作品のなかに跡づけている。さきに『大言海』にかげろふ(陽炎)に「イトユフ。アソブイト。遊絲。野馬」とあることを言った。『漢和大辞典』によると，野馬＝陽炎は，それでよさそうであるが，遊糸の方はどうか。そこに引いてある2例：

游糸空ニ映ジテ転ジ，
高楊地ヲ払ツテ垂ル（沈約）
百丈ノ游糸争ツテ樹ヲ繞リ，
一群ノ嬌鳥共ニ花ニ啼ク。（盧昭鄰）

この游糸ははっきりとゴッサマーである。

5世紀から12世紀にかけての700年間，中国において游糸は春の詩における好個の題材で，柳絮，燕，蝶，落花などと共にひんぴんとうたわれているという。わが国では遊糸はほとんど秋に限られるのに，中国ではもっぱら春にうたわれる。しかも空にほのかに流れる蜘蛛の糸を，リアルにみとめたものでなくてはうたわれぬうたい様である（92—3頁)。

さて平安時代のわが国にあっては，「かげろふ」という語は，平安前期の和歌にも，物語類にもしばしば出てくる。『源氏物語』に「かげろふ」の巻があり，前述の『かげろふ日記』は言わずもがな。これはしかし，空気のちらめく陽炎か，カワトンボ・ハグロトンボ（トンボ目)，ヒメカゲロウ・ガガンボカゲロウ（カゲロウ目)，クサカゲロウ・ウスバカゲロウ（脈翅目）というような，はかなく弱弱しい昆虫か（いずれも蜻蛉と表記できる)，いずれともきめがたく，またいずれでもよさそうであるが，「かげろふ」の用語例をいくら精細にしらべてみても，川口久雄の言うように，これをみな空を流れるゴッサマーと断定できるものは，見出せない，と錦は言い切っている（100頁)。それが平安中期，後期，鎌倉前期と時代をくだると「あるかなきかなる物をば，かげろふといふ」と『能因歌枕』にあるように「かげろふ」の第一義は，実体のない，理念の世界のものになってしまうようである。かげろふも遊糸も野馬も，当時の人人には，実体はもはやどうでもよかったので，観念的遊戯の素材になり得れば，それでよかったようである。

しかし，不思議なことに「遊ぶ糸」となると，必ずしもそうではない。初出は『和漢朗詠集』(下巻・晴）にある和歌：

かすみ晴れみどりの空ものどけくてあるかなきかにあそぶ糸遊

出典・作者ともに未詳で，末句の「あそぶ糸遊」は一本では「あそぶ糸みゆ」となっている。どう

も後者の方が元の形で，後年「糸みゆ」が誤って「糸遊」と書写されたのであろう。ところが『和漢朗詠集』のこの歌以後絶えて所見がなくて，約100年後の『永久四年百首』にひょっくり，また姿をあらわす。『永久四年百首』には6首，春の歌題「遊糸」として詠まれている。中には，先に『大言海』に引かれていることを述べた

はるばると浅緑なる大空にあそぶ糸をやながめくらさん（常陸）

があり，また

つれづれとのどけき空に遊ぶ糸を我より外に人や見ゆらん（大進）

など，「これらの歌をよみ味わうと，当時の歌人はまさにゴサマアを実際に見ていて詠んだとしか思われない節がある」と錦三郎は言う。同感である。ところで注意すべきは『永久四年百首』ではすべて「遊糸」「遊ぶ糸」とあったものが，やがて「遊ぶいとゆふ」というのが現われ，やがてまたその前半が省略されてか，単に「いとゆふ」というのが出てくることである。

「いとゆふ」だけを考えれば，幸田露伴の疑問ももっともなこととなり，また黒川春村の『碩鼠慢筆』に暗示されているように，宮廷の几帳ないし女性衣裳の絲結いとゆひなどに由来するところもあるかも知れない。しかし，平安時代中期から鎌倉初期にかけては，文化人たちが蜘蛛にとりわけ関心をもっていたようで，したがってまた，当時，春・秋の日和のおだやかなとき，野外の空をちらめき流れる細い糸（ゴサマア）にも気づいていたもののようである。「ただ，いえることは，平安時代から鎌倉時代にかけて詠まれた遊ぶ糸・遊ぶ糸ゆふ・いとゆふ，いずれも陽炎を詠んでいるのではないということだけは，はっきりしている。かれらが詠んだ遊ぶ糸は地上にちらちらする光の屈折では全くなく，みどりの空をながれる，あるいは林に，あるいは柳の枝にかかる白い細い多くの糸を詠んでいる。かれらは，かがろふと遊ぶ糸――いとゆふとを，明らかに区別して詠んでいるとみられる」というのが，錦三郎の結論であり（前掲書，112頁），私もこれに同調したい。

ところが江戸時代になると，遊糸すなわち陽炎というように，両者はいっしょくたにされてしまう。契沖のごときは「野馬と遊糸とは同じ物也」（『円珠庵雑記』）と割り切っている。北村季吟にも「野馬と遊糸とは同じ物也，野馬をかげろふといふ也」（『八代集抄』）とあるとか。つまり遊糸はすなわちかげろふ，かげろふは陽炎であるとして何の疑問ももたれなくなっているのである。ゴッサマアの知識は完全に失われてしまったのであろう。

芭蕉の発句に陽炎・糸遊を詠んだものをたどってみるに，

1　枯芝ややかげろふの一二寸（笈の小文）
2　丈六にかげろふ高し石の上（同上）
3　かげろふの我肩にたつ紙衣かみこ哉かな
4　かげろふや柴胡さいこの糸の薄曇（猿蓑）
5　糸遊に結びつきたる煙哉　室の八島
6　入りかかる日も糸ゆふの名残かな

とあって，そのいずれもが明らかに陽炎であって，芭蕉もやはり陽炎＝糸遊説である。ただ芭蕉は体験に即してリアルに詠み上げているようである。

〔注〕

参考までに『芭蕉句集』（日本古典文学大系）における大谷篤蔵の句釈を引いておく。（26—28頁）

1　早春の野外，枯芝の上に春のいぶきを感じとった句。ほのかに立ちそめて，まだはっきりと認められぬ程度の陽炎。2　石台の上に陽炎が高く燃えているが，恰も丈六の仏像が立っておられるように思われる。3　冬のまま着込んだ紙子の肩に，ふと気がつくと陽炎がゆらいでいる，さすがに春だの意。4　柴胡は多年生の薬草。糸のように細い柴胡の芽立ちに，陽炎のゆらゆらと立ちのぼる陰りがうつる。5　室の八島に参詣した時の句。室の八島の辺の野に立つ糸遊に，伝説の煙も結びついて，陽炎がさかんに燃えている。〔校注者も糸遊＝陽炎としている。〕6　日はまさに暮れんとしている。刻々と日の沈んでゆくにつれ，陽炎もまた薄れてゆく。入りかかる日が陽炎の別れでもあるの意。

驚いたことに，享保から天明まで存命した博学の清田儋叟セイタタンソウの『孔雀楼筆記』に

陽焔カゲロフノモユルトイフコト，歌ニヨメリ。北溟キタウミ〔越前の日本海の浜辺〕ノ浜辺ニテ，白砂中ヨリ，ワラノ火ノフスボリタルゴトク，所々ニ立〔チ〕ノボル。ソノ所ニ至レバナニモナシ。我来リシアトニモ左右ニモアリ。浦人ニ問ヘバ「カゲラフノモユルニテコソ」トイフ。ココニ於テ，古人ノ造語ノ孟浪ミダリ

ナラザルヲシル。予少壮ワカキノトキ郷里〔播磨〕ニアリテ，海ヲ家トスルホドニ，海辺ノコトニ熟ス。サレドモツイニコレヲ見ズ。備前ノ人ニトヘドモ，亦コレヲ見ズトイフ。播磨・備前トモニ海ヲ南ニウケ，シカモ白砂ノオホキトコロナレバ，一人ヒトシオオホカルベキニ，ソレカトイフモノモ見ズ。云云。

とある。僧叟は少年時代を明石の海辺ですごした。しかも陽炎を「ツイニコレヲ見ズ」と言っている。もっとも彼は生涯病身の上に足が不自由で余り外出しなかったとは言うが，陽炎を壮年まで知らなかったとは驚くほかない。この一文も『飛行蜘蛛』の著者に教えられて知った次第であるが，病褥でも本を離さなかった僧叟も，当時の文人の弊に従って，直接自分の目や耳で事象を体験することには，習慣づけられていなかったのであろう。ちょっと書き添えて「かげろふ考」を終ることとする。

花柳の巷

花柳巷は，花街柳巷の略である。それに助詞の「の」を入れて花柳の巷ちまたという。

花街も柳巷も中国では遊里のことで，そこの妓院・妓楼にはむろん花が，生花にせよ鉢植えにせよ，飾ってあったであろう。花といえば中国ではボタン（牡丹）である。ボタンの豪華な花が獅子を模様にあしらった花瓶なり植木鉢なりに賑賑しく飾ってあったことであろう。その遊里は，唐・宋の頃，いずれも柳の木に囲まれていた。花街・柳巷といわれたゆえんである。

ところでわが国の遊廓は，天正の頃（1573～1591）原三郎左衛門・林又一郎という浪人が願い出て，折から応仁の乱(1467)で焼かれて，久しく荒野のままになっていた萬里小路二条に開いたものに始まると言われる。そのときここに柳を植えたのは明ミンの花街柳巷の真似であったとされる。当時勘合船，御朱印船に乗ってしばしば明に赴き，明の都西安の東西妓院の様子にひそかに通じていた京都五山の僧たちに，これまたひそかに教わったのであろう。ところが後に遊廓が六条室町に移ったときには，周囲に人家が建てこんでいたので，柳の並木をつくることができなかった。そこで，せめて昔の名残として廓くるわの出入口に1本だけ柳を植えた。六条三筋町出口の，一名見返り柳というのがそれであった。それが先例となって，爾来，遊廓といえば見返り柳がつきものとなった。だから江戸新吉原の大門前の見返り柳は，京都の廓を仲介として，遠く唐の平康里ピンカンリの柳樹にまでさかのぼると言うことができるわけである。

ところで花の方であるが，これがわが国では，ボタンではなくて桜になってしまった。柳と桜といえば，『古今和歌集』に有名な

見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりけり

が思い出される。しかし，これは都市風景のはずで，柳の方は街路樹・並木と見てもよさそうである。平城京に街路樹があったかどうか，文献的にはわからないそうであるが，長岡京に柳を植えたことは確かのようで，さらに平安京になると，朱雀大路の柳樹に落雷があったという記事があるそうである（続日本紀，承和3年〔836〕条）。してみると，京都の主要道路には柳の並木があったらしいのであるが，桜並木があったかどうかはわからない。柳とこきまぜられたのは，だから，おそらく，街路沿いの神社仏閣か貴族の邸宅にあった桜の木なのであろうか。

後年，吉原では，年中行事の一つとして三月の仲ノ町の夜桜ということが始まった。これは道路の中央に臨時に花の咲いた桜を植え並べ，下に青竹の垣を結び，山吹を植え添え，雪洞ぼんぼりなども立てて，花やかな夜景を演出した。

こんなことから，花といえば桜を連想し，花柳といえば芸娼妓のたむろする花やかな一廓ないし別世界を思うように，私どもの父老はなってしまっていたのである。

ところで，ことばはとかく堕落の一途をたどるものである。そこで『広辞苑』に「花柳」の項を見ると——

①紅花と柳と。

というオーソドックスな語義はともかくとして，

②芸者や遊女など。また，遊里。

花柳界——芸娼妓の社会。花柳の巷。

花柳病——（花柳界で感染する病の意）性病

……

ということになっているのである。

（滝川政次郎『吉原の四季』139-143頁。参照）

みせ(店)とたな(棚)

みせとたなは，みせだなを，下を略してみせ，上を略してたなというようになったものの由で，今日，いずれも商店の意味である。

△みせだな（見世棚・店棚）——中世，平安末期ごろに発生したもので，道路沿いの，通りがかりの人に見えやすいところに棚を作って商品を並べた。それが見せる棚，つまり見せ棚であった。それがやがて鎌倉時代には，そういう施設をもった常設の小賣店そのものを，見世棚と言うようになった。室町時代には単に店と称し，江戸時代には，店いえばは商家を意味した。

私が大学を出て岩波書店にはいった頃（昭和9年＝1934），岩波書店はまだ岩波茂雄の個人経営時代であったが，古い人たちは「おみせ」と言っていた。私どもにはなじめないばかりでなく，ひそかに屈辱を感じ，反撥を感じたものであった。そして職業欄に会社員と書いてよいかどうか，とまどった思い出がある。

△たなについては，独立して商店の意味に用いることは，今ではないようであるが，城下町などでは町名に「魚の棚」とか「塩棚」などいうのが今でも残っているところがある。その商家に出入りしていた商人・職人・仕事師，またそこに勤めていた者などは，その商家を敬重して「おたな」と言ったものである。したがって「おたなもの」（御店者）ということばもあって，商家の奉公人を意味した。

水汲みかわる鯉棚の秋　　野径

『ひさご』にある句であるが，鯉棚はむろん鯉を賣っている魚屋である。

△みせ（店）——上記みせだなの下略で，いうまでもなく商店・商家のことである。店を張るといえば，商人が店を設けて商品を陳列することだし，店を開く→開店。店をたたむは，商賣をやめる，店じまいする，つまり閉店することである。しかし，開店・閉店には，商売を始める，やめるという意味のほかに，営業時間になって，店をあけて客を迎え入れること，営業時間を終って，店をとざす意味もあるので，ことばというものは微妙である。また単に店といって，とくに商店・商家の，商品を陳列して顧客の購買に応じる部分・場所をさす場合がある。つまりみせさき（店先）のことで，みせさきということばも出来ている。その店頭での商売をみせあきない＝店売てんばいといって，大抵は現金取引が建前で，小商人には日銭ひぜにといって日日，現金収入をもたらすので喜ばれる。品物によっては店先に陳列しておいても，なかなか売れなくて変色したり変質したりすることがある。そういうことを，またそういう品物のことを，なたざらし（店晒し）という。商店から注文を受けてする賃仕事がたなしごと（店仕事）。みせあきうど（店商人）は店を張って営業するが，店を張らず，商品を携行して売って歩く者をたびあきうど・たびあきんど（旅商人）と言う，つまり行商人である。行商には商品を天秤棒てんびんぼうでかついで売り歩くことがある。そういう商行為を，またそういう商行為をする人を，ぼてふり＝棒手振りと言った。

△とこみせ（床店・床見世）——『広辞苑』を見ると，「①商品を売るばかりで人の住まぬ簡単な店。②持運びのできる小さい店。屋台店」とある。今日の常識では「街上デ物ヲ売ルニ用イル屋台店デ，持チ運ビノデキルヨウニ作ッタ小サキ店」（『大言海』）ではなくて①の人の住まぬ，住む余裕のない，商品を売るばかりの店を，もっぱら言うようである。これは床トコ，つまり床屋トコヤ＝髪結床カミユイドコと関係のある語で，理髪店は今ではいずれもりっぱな店構えをしているが，かつては橋のたもとなどの路傍にせいぜいヨシズやマクを張り，床トコすなわち腰掛を用意して男のひげをそったり髪を結ったりしたのであった。ちなみに髪結いとは男の髪を結うことで，女は自分で髪をしまつするのが建前で，したがって，もっぱら女の髪を結う職業人はかつてはなかった。だから後にもことさら女髪結いと言っても区別する必要があったわけで，女髪結いが出来たのは明暦3年(1657)の大火，いわゆる振袖火事後だという説がある。さて，この手軽な髪結床のやり方を物売りに利用したのがとこみせであったのである。

*

また「みせ」というと遊里とも関連がある。昔，妓楼（遊女屋）では，街路に面して格子構え

などにし，遊女をそこに坐らせて嫖客の気を引かせた。そういう座敷を，またそこに遊女たちが居並んで客を待つことを「店」と言った。つまり張り見世である。だから店を張るといえば，商人が店を設けて堂堂と営業することを言うと共に，遊女が張り見世することも言ったわけである。店を引くというのは，そこで，遊女が張り見世に出ない，つまり勤めを休むことであった。

*

ついでにしにせに関説しておこう。ふつう老舗と書き，父祖の時代から受けついで，手がたく営業している店の意味であるが，これは江戸時代に上方に発した“仕似しにせ”ということばに由来する由である。文字どおり，まねる，似せる意味の語で，祖法墨守・家業保続というわけで，江戸幕府の伝統的建前であった頑固な保守主義の縮冊版でもある。目前のもうけでなく，信用を重んじ手がたく商売をする。西鶴『織留』一，“親の時より次第にしにせたる見世（店）にて今大分の商あきなひ事あり”とか，同じく『西鶴置土産』四，“わづかの身躰（身代）にて親よりしにせの商ひ”とか，『本朝二十不孝』一，“わづか四貫目にたらざる借銭，是にて数年のしにせをやむる事あるべきか”などとある。今デパートなどによく「老舗街」というのがある。商売人の商魂はいつもたくましいもののようである。

（杉本つとむ『現代語』現代教養文庫，195頁参照）。